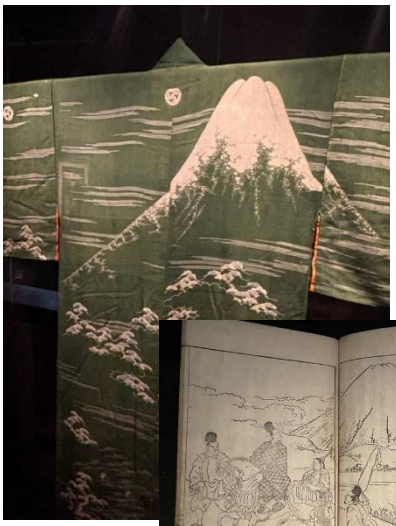
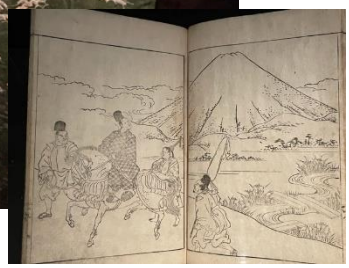
141 着物の楽しみ方（その１）（2022 年 12 月 15 日）

パリのケ・ブランリ美術館において、KIMONO 展が開催されています（2023 年５月 28 日まで）。ロンドンのヴィクトリア＆アルバート美術館が企画した展覧会で、江戸時代から現代までの着物や着物からインスピレーションを受けた洋服など、素晴らしいコレクションが展示されています。

着物とは、文字通り「着る物」を意味し、元々は単に衣服を示す言葉でした。しかし、明治時代になってから西洋諸国の影響で日本人も洋服を着るようになり、日本の伝統的な衣服のことを着物又は和服と呼ぶようになりました。ヨーロッパ人を魅了してきた KIMONO の魅力とは、いったい何なのでしょうか。KIMONO 展のコレクションを見ながら、着物の楽しみ方をご紹介します。





まず、着物のデザインを楽しむこと。様々な色と柄の着物を目にすることができます。植物、鳥や魚といった自然をモチーフにしたものが多く見られます。日本人は季節感を大切にしますので、薄手の夏用の着物には夏に咲く花が描かれるなど、季節に合った図柄が選ばれます。

富士山を描いた着物（写真右）は、900 年頃に成立したと考えられている伊勢物語を、18 世紀の浮世絵師がイラストで表現した絵物語にインスピレーションを受けた作品と考えられています。幾何学模様の着物もあります。中には、骸骨の柄の着物も展示されています！お気に入りのデザインを探すも良し、江戸時代の着物であれば、当時の流行や職人の創意工夫を発見することができます。

次に、日本の伝統技術を知ること。着物には、様々な巧の技が用いられています。ある着物の生地を拡大した左側の写真をご覧ください。複雑な織り方をして模様を作った白生地を、紅花で赤く染めたものです。鳥の図柄を出すために、鹿の子絞りと言われる技法が使われています。鹿の子絞りとは、絞り染めの一種です。布を糸でくくって染めると、糸でくくっていた部分は染まらずに白く残り、これによって模様を作り出されます。この他、型紙を使って染色した型染めの着物や刺繍が施された豪華な着物も展示されています。

三つ目は、着物から日本の歴史や文化を知ること。江戸時代に大名の奥方が着ていた打掛は、現代では婚礼衣装（写真右）になっています。一方で、江戸時代の男性が着ていた裃（かみしも）（写真左の上部）は、現代では、役者以外で身に着ける人はほとんどなく、男性の正装は、裃を付けない羽織袴姿です。

現代の日本人は、着物を着る機会が減りましたが、結婚式の他に、子どもの成長を祝う七五三や成人式といった人生の節目には、着物を着ることを選ぶ人が多くいます。成人式に女性が着る着物は、振袖（写真右）です。お祝いに相応しいおめでたい図柄が描かれ、刺繍や鹿の子絞といった伝統的な技法が使われており、伝統が今に受け継がれています。

この他にも、着物の楽しみ方があります。一回ではご紹介しきれないので、次号に続きます。

ケ・ブランリ美術館「KOMONO」展　https://quaibranly.fr/en/exhibitions-and-events/at-the-museum/exhibitions/event-details/e/kimono（英語）